

<研究資料>

「ひきこもり」と社会

“Hikikomori (Social Withdrawal)” and Society

津 田 均*

Hitoshi TSUDA *

(当論文は、2006年2月9日に総合保健体育科学センターコロキウムで発表した内容に加筆したものである)

はじめに

当大学で学生相談を始めて最も強く感じたことは、何よりも難しく、かつ大きな課題なのが、「ひきこもり」学生への対応であるということである。統合失調症は、軽微な場合は何とかコントロールされることが多い。重症の場合はそれなりの治療、リハビリテーションのルートへ乗せることになる。神経症と気分障害は、精神療法的にかなり勢力を費やさなければならない場面、進路において学生が彷徨する場面はあるが、1年程度の猶予期間をとれば、大学への適応と就職に向かうステップに戻って来ることがほとんどである。激しい自傷行為を繰り返すようなタイプの学生は、想像していたほどにはいなかった。これに対し、ある時期からぶつ切りと通学をやめ、指導教官、両親からの連絡で、しぶしぶ(?)学生相談にやって来るが、相談に通い続ける場合、早期に中断してしまう場合にかかわらずその状況から頑として動かない学生の数は、相当数に上る。彼らはまた、薬物療法の利益を受けるところが少ないという点でも特徴的である。強迫症状、対人過敏、うつ状態などで薬物療法に反応する部分のある場合は、そのことがまだしも治療関係を作る端緒になるが、その効果は限られている。

「ひきこもり」に見られる「社会」への不耐性

これまでにも「ひきこもり」についての議論は数多くあったが、発表者にとって不思議であったのは、それらが、彼らの中心に存在する「社会」への「アレ

ギー」を十分議論の内に据えていない点であった。極論すれば、「ひきこもり」の人が「社会」に触れるのを避けるのと同じように、「ひきこもり」についての議論は、「ひきこもり」の人と「社会」との連結のところに容易ならざる齟齬が存在していることに触れることを避けていたように見える。議論の多くは、そこに、彼ら本人の側の自己愛、競争回避といった、確かに彼らにおいて無視できない要素として存在している特徴を標識として持ってきて、それで「ひきこもり」を説明しようとする。しかしそれのみでは、なぜそのような要素が決定的に彼らをして自分の生活から「社会的」要素を排除させてしまうのかは、明らかにされない。

実際には彼らは、「社会」を想起させるものから常に強い圧迫を感じるようになっていて、そのことが、彼らの表面に現れている性格特徴などよりはるかに問題の根本となっている。(彼ら-彼らの多くは男性であるが徐々に女性例も出現しつつある-のほとんどは、話をしてみれば実に普通の印象を与える青年である。)「ひきこもり」の始まったときの混乱期が過ぎると、たいいてい、家族は学生と、通常の世間話などはできるようになる。しかしそれも常に、彼らの将来の社会的現実のことについては、腫れ物に触らないでいるような態度をとっている限りにおいてである。彼らがほぼ必ず陥ると言ってもよい昼夜逆転の生活は、昼間には、たとえば背広を着て忙しく立ち歩いているサラリーマンといった「社会」を想起させる事柄が巷に満ちていて、それらが彼らに圧迫となっているからにほかならない。

このことに関連して、発表者に強く印象に残っているのが、かなり以前に別の場所で出会った2症例であ

* 名古屋大学総合保健体育科学センター、学生相談総合センター

* Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Center for Student Counseling, Nagoya University

る。そのうちの一人は、短大卒業後10年以上、ときおり外食産業のアルバイトに就く以外は家にひきこもっていた青年である。彼の心優しい雰囲気合うかと思いいボランティア活動を勧めたところ、2年あまりにわたって某所で安定して福祉系の活動を行い、その間すでに職員とのミーティングなどにも参加していた。このことが評価されて常勤職になるチャンスが与えられたのであるが、彼はそのとたんに、自分がそこの職員としてミーティングに臨まなければならないという圧迫感が頭の中から離れなくなり、結局4日でそのポストを放棄せざるを得なかった。もう一人は、優秀な成績をもって大学院に入学していたが途中で学業を放棄した大学生である。よくよく尋ねてみると、彼は、実際同僚に遜色ない能力を持っていたし、実践能力はむしろ自分の方が高いとも自負していた。それにもかかわらず、同級生はこれから社会に出て中枢を担っていく人間であるのに対し自分はもともとそこからみ出している、周囲はそのことを見抜いて自分を嘲弄しているのだという、ある種の被害関係念慮を常に持っていた。

社会を構成する自己愛の理不尽さ

ところで、特にこの2番目の例の大学生には、人間はある種の「正統性」を僭称することによってはじめて「社会」にはいれるが、その「正統性」はけっして実質に裏付けられているものではなく、単に理不尽に決まっているものに過ぎない、そして自分は必ずその「正統性」の外にはじき出されているという確信のようなものがあつた。彼の場合、このような確信の根は、彼の母との関係に端的に現れていた。彼からみれば、母親はとにかく実質に関係なく社会的にオーソドックスなものだと決めてかかり、自分にそれを押しつけてくる人だつたと言うのである。社会の中に何か正統なものとして正統でないものがある。それは人間が住んでいる環境という「自然」の中から必然的に決まってくるものではなく、親の価値観が親の側の自己愛によって子どもに理不尽に投げ与えられる結果決まってくる。社会に対するこのような感覚は、「ひきこもり」の人の多くが持っている。

このことはまた、なぜ現代社会のホワイトカラーにのみ「ひきこもり」が出現するかということにヒントを与える。「生きのびる」こと自体がきわめて大変であった時代には、生物界との共通部分を人間がより多く持っていて、養育や教育は、まずは、生殖を含めた「生存」にひたすら奉仕していたであろう。しかしどこかで、人間の養育は、生存を目的とする営みと、より優れた社会的正統性を子どもに与えるという目的とに分離す

る。特に現代の社会は、この隙間が非常に大きくなった社会だと言えるであろう。親の立場から見た「正統性」を子どもに与えたいという親の側の欲が、子どもの側からは、親の側の自己愛を、「正統に」、反論できない形で押し付けようとするものにしか見えないという事態は、中流以上の階層で非常に生じやすくなっていると言える。「ひきこもり」の人は、この構図に内包されている理不尽さと虚偽に敏感な人であると同時に、この構図が現代の日本社会全体に相当に本質的なレベルで含まれている構図であるということにどこかで気づいている人であるように思われる。

気づくこと、行動すること、語ることと文化的条件

ところで、このことに気づいているといっても、彼らにおいては、その気づきは、その構図を事実として受け入れそれに反抗しつつ行動することに結びつくわけではない。彼らが現実に取り得る最終的な行動は、単に「ひきこもる」ということなのである。さらに、とにかくもこのように自分を取り巻いている状況について語るということさえできないケースも多い。彼らは、そもそも誰かに向かって自分の状況を語るということをしていない。さらには、なんとか「ひきこもり」から脱出したときに振り返ってみると、ひきこもっている間自分が何を感じていたかということさえもわからないまま時間が過ぎていたという人もいる。その場合、ある期間、自分の歴史をまったく失っていたようにさえ見える。

まず、彼らがどうして自分の状況を語らないかということから検討してみよう。このことは、「ひきこもり」現象が、なぜホワイトカラーの家庭に多いかということだけではなく、なぜほぼ「日本に」限られているかということにヒントを与えるように思う。

彼らの周囲に生じていることが、彼らがそれにどのような「気づき」をもっているかという問題はさておきとして、この社会を構成している「正統性」は自分から離れた別のところに理不尽な形で存在していて彼ら自身はそれに対してなすすべがないという構図であるという仮説が正しいと仮定しよう。それならば、彼らは、たとえ自分が何らかの自身にかかわることを他人に述べたとしても、それは常に自分の外にある「正統な」場所で理不尽な処理を受けるだけであると感じることになっていても不思議はない。そうならば、彼らは他者に向かって自らを語るということさえできなくなるであろう。実際このようなことが生じていることは、彼らに「かちんときた」怒りの表出が見られるときに垣間見ることができる。その怒りははたいてい、われわれの側がこのような鍵括弧つきの「正統な」場所に立って

不当にも何かを押し付けていると彼らを感じたときに生じているようである。

このように、自分個人のことを他者との場所で語れないという現象に出会ったとき、われわれは日本文化のコミュニケーションの特質を、西欧的な個人主義との対比の中で考える必要にせまられる。西欧的な個人主義が本当のところどういふものなのか、これは日本人にとって、体得することは困難である。したがってそれについては何を言っても外部からの推測に過ぎないことになるのではあるが、しかし個人主義のひとつの要素として、私的な事柄（それは公の事柄についての個人の意見のことには限らない！）を公の場所で述べるという鍛錬を繰り返すことによって成立するものであるということがあるのではないだろうか。これは、日本的な会話のあり方とは甚だ異なったあり方である。なぜならば日本では、全体、公の流れが私を越えたところに成立していることを受け入れるあり方が優勢だからである。

日本の伝統を作ってきた、集団が1つの方向性を共有していくような文化は、ここ20年あまりである程度、個々の追及を尊重する「個別主義」的方向へ変化した。しかし、これは、たえず個が普遍、公へとせり出しながら成立していく西欧型の個人主義が場所を得たことをまったく意味してはいない。むしろ現代は、個別主義的な追及と、多様化しながらもやはり「間」の力として集団的に存在している様々な社会的要請への応答とを、多線的、複線的に懸隔を置きながら維持していくことによってはじめて適応できるようになっている時代なのではないだろうか。このことは何も抽象的な事柄ではない。たとえばわれわれは、日本の就職試験において個人の趣味を聞かれたとしたならば、すでにそこで、それを社会人の余技にふさわしいものと見なすか「おたく」的な趣味とみなすかという視線に対して、身構えなければならなくなっているのではないだろうか。

「ひきこもり」の人は、少なくとも事例化した後は、自分の「個別」の追求はおしなべて社会的な正統性を要求される場に引きずり出されそこでの判断に曝されるという圧迫に置かれていて、そのような可能性をすべて排除するしかなくなっているように思われる。それゆえ彼らは、個別のことを表に現すことにはきわめて用心深い。しかし、「公式」であることを僭称する視線のはいらぬ空間では、むしろ自分に向かう視線を強く求めている。ここに彼らとインターネット文化との親和性がある。以上のことの背景には、やはりここに述べてきた日本的コミュニケーションの特徴があると考えられるであろう。

しかし、彼らは、先にも述べたように、単に他者に対して語れなくなっているだけでなく、自分で何を感じているのかもわからなくなっている場合もあるようである。このことは、彼らの中で問題が非常に根深い場所が生じていることを示していると同時に、語る可能性と感ずる可能性が、人間においては、不可分な関係にあることを示してもいえるだろう。大橋は、「聞く」ことの哲学を展開する中で、自らが「語る」ことが可能となるためには、自らのことを「聞き」取る「場所」が開かれていなければならないと論じている。「ひきこもり」の事例は、逆に、「語る」ための「場所」が開かれていないときには、自らの有り様を「聞き」取ることさえできなくなってしまうことを示しているように思われる。

「ひきこもり」から生まれる哲学

「ひきこもり」の人の場合、語る可能性も奪われていることが多いゆえ、語ることのできる人の報告は貴重である。そのような報告を跡づけることは、「ひきこもり」の病跡学と言ってもよいような領域に踏み込むことになる。

特に最近われわれに多くのヒントを与え続けているのは、哲学者の中島義道氏である（彼は、自分が一時ひきこもり状態になったことを著書の中で述べている）。先に、「ひきこもり」を、西欧的な個人主義と日本的コミュニケーションとの関係で論じた部分は、氏の著書によるところが大きい。彼は、ウィーンでの文化摩擦経験をもとに、西欧人が私的なことを公の場所で如何に堂々、延々と話し続ける人たちであるかを述べている。このことについての考察は、ヨーロッパ人のある一面を強拡大したというところはあろうが、通り一遍の日本人の海外体験報告にない迫力に満ちている。彼は、日本人が個人の言葉を持てるようになるにはどうすればよいかということについてその後も論じ続けるが、これには、私的なことについての言葉を圧殺するような日本文化のひずみを受けてきた自身の前半生への反動という面があるであろう。両方の文化への両面的感情がはっきりと出た論になっているのが特徴である。今ひとつ興味深いのは、彼が、「死ぬべく定められた人生を理不尽に与えられて生まれ落ちてきた」ということによる不安発作的な症状とたえず戦いながら生きていて、それが彼自身の純粹哲学的な時間論とも結びついていることである。そこには、「ひきこもり」現象と、実存不安や時間論との間を結ぶ通路のあることがうかがわれる。

もう一人の実例としてあげておきたいのが、キルケ

ゴールである。彼の人生は決定不能、あるいは振れた決断の葛折りである。彼は暴君的な父親に神父になるように教育された。その父親が生きている間は、彼は、神学大学の卒業試験は受けなかった。父親が死ぬと、もはや卒業してもよいといって試験を受け卒業したが、牧師にはならず、父親の遺産で執筆を続けた。レジーナという女性と付き合ったが、婚約した直後にその婚約を破棄した。父親の遺産がなくなりいよいよ牧師として生活するほかないとなったとき、デンマーク国教会に毒舌的な攻撃をしかけて自分のことを批判させた。自ら、牧師になることは不可能になるように振舞ったと言える。しかし、彼こそが本当の信仰を知っているという読者が彼にはついてた。このような自己決定の振れた回避の仕方は現在の「ひきこもり」の人のあり方に重なっている。やはり興味深いのは、彼が実存主義の系譜を切り開いた存在であったことである。キルケゴールは、意識的な思考は確かなものにたどりつけないと主張し、不安の、あるいは絶望の意識のみが、意識そのものであるとした。彼の哲学には、不安や絶望が無限反復に至って決して止揚されないで終わるような論理が織り込まれている。

アンガージュマン (engagement) のような掛け声とは

いちばん無縁に見える「ひきこもり」現象が、実存主義を新たな装いをもって取り上げる可能性と結びついているのは、興味深い。

参考文献について

- キルケゴールの著作については、
 キルケゴール：不安の概念、序文ばかり。(氷上英廣、熊沢義宣訳)、白水社、東京、1978
 キルケゴール：死にいたる病、現代の批判。(松浪信三郎、飯島宗亭訳)、白水社、東京、1990
 キルケゴールの「反復」については、
 ドルレーズ：差異と反復 (財津 理訳)、河出書房新社、東京、1992
 中島義道の著作については、
 中島義道：対話のない社会。PHP 新書、東京、1997
 中島義道：たまたま地上にほくは生まれた。講談社、東京、2002
 などを参照のこと。
 大橋の著作は、大橋良介：聞くこととしての歴史。名古屋大学出版会、名古屋、2005、
 サルトルの『嘔吐』を「ニート」に結びつけた、一見アクロバティックだが興味深い試みに、会田正人：サルトル『むかつき』-ニートという冒険-。みすず書房、東京、2006がある。

(2007年1月4日受付)